『幻を追う人』読解のこころみ (9)

井　上　三　朗

目　　次

1．はじめに
2．欲望の世界
3．死の魅惑と恐怖
(1)　マリー＝テレーズの死の想念
(2)　プラス夫人の不幸への愛と死への歩み
(3)　マニュエルの死の想念と恐怖
(4)　死の城の住人たち
(5)　まとめ
4．結び

（太字は今回掲載分）[110)]

3．死の魅惑と恐怖

(5)　まとめ

『幻を追う人』を、死の主題との関連で読解してきた。マリー＝テレーズの死の想念、プラス夫人の不幸への愛と死への歩みをしらべ、それから、現実生活におけるマニュエルの死の想念と恐怖を一瞥したあと、マニュエルの作成した物語『在り得たこと』を死という観点から分析した。すなわち、伯爵、ジョルジュ夫人、アントワーヌ、子爵夫人、作中人物としてのマニュエルが死とどのようにかかわっているのかを概観し、死を体現するジョルジュ夫人をのぞいた城の住人たちが、死の恐怖をおぼえつつも、死に魅せられていくありさまをみた。ここまでの検討によって、作品『幻を追う人』の全体、とくにマニュエルの内面世界を形象化した『在り得たこと』が、死の想念と恐怖の充満する世界であることは十分に納得できる。

『幻を追う人』における死の想念と恐怖は、作者グリーンが共有しうるであろう。というより、作者グリーンじしんのものであるかもしれない。ちょうど『在り得たこと』が語り手マニュエルの内的世界を暗示しているのと同じよう

に、『幻を追う人』全体は、作者グリーンの内面世界を反映したものとうけとれる。私たちは、『在り得たこと』の人物である伯爵、アントワーヌ、子爵夫人が、死に魅せられ、死の恐怖をいだくという点で、マニュエルの分身的存在であると指摘した。それと同様に、マニュエル、マリー＝テレーズ、プラス夫人は作者グリーンの分身的存在であるとみなしうるし、『在り得たこと』の中の人物たちもまた、結局のところ、語り手マニュエルの内心とともに、というより、マニュエルの内心を越えて、作者グリーンの内的世界を投影していると解される。『幻を追う人』は作者グリーンにおける死の魅惑と恐怖を表出している。とすれば、グリーンにとって、作品創造は、『在り得たこと』を物語るマニュエルの行為と同じく、欲望との関連とともに、死の苦悩とのかかわりにおいても、カタルシスまたはexorcismeの価値を有することになるのではないだろうか。書くことが肉体的な欲望のレベルでのカタルシスないしexorcismeの営みであることはすでに論じた。グリーンは『幻を追う人』を制作中、すなわち、1933年3月30日付の『日記』のなかで、こう綴っている。

「夜明けに、人生が終わるのではないかという息苦しい不安をいだいて目をさましたことのない人びとは、私の本を好きにはなれないだろう。私は暗示の助けをかりて、死ぬことの恐怖が何であるかを言おうとこころみた。このような本のなかで、病いや死のことをほのめかすことは、言うなればそれらの威光をいやますことになるのだ。(…)

私の今度の小説は、これまでに書いてきたすべての小説のうちで、もっとも常軌を逸したものだ。しかし自分の本の中にこの狂おしい思いを移し入れることがなければ、それが私の人生のなかに腰を据えないかどうか誰が知ろう？　私に均衡のようなものを保つことができるようにしてくれているのは、おそらく私の本なのだ」[111]。

グリーンは後半の段落で、「自分の本の中にこの狂おしい思いを移し入れることがなければ、それが私の人生のなかに腰を据えないかどうか誰が知ろう？」と問うている。「狂おしい思い」(folie) とは、前半の段落で死の恐怖が問題になっていることから、死の想念に関連するものだと理解できる。死にまつわる苦悩の表白がグリーンに、「均衡のようなものを保」たせていることがうかがえる。『在り得たこと』の語り手マニュエルが、死の魅惑と恐怖を徹底的に言いあらわすことによって、死の苦悩の克服をくわだてたのと同じように、作家グリーンもまた、死にかかわる「狂おしい思い」を作品の中にぶちまけることで、死の恐怖からの脱却を指向しているのである。とはいえ、グリーンは1932年12月2日付の『日記』のなかで、次のように述懐している。

「かつて死ぬことの恐怖は、不意に私に襲いかかり、私の心を凍らせたものだった。

しかし時とともに、またよく考えるにつれて、私は、死の中に、私たちが苦しみなしに入って行くはずの暗い大寺院しか見なくなるに至った」[112)]。

ここでは、死の恐怖が過去のもので、今では、死を、「苦しみ」(angoisse)をいだくことなしに入り込む「大寺院」のようにみなすまでになったことが述べられている。この日記がしたためられたのは、1932年12月であるから、『幻を追う人』の中の『在り得たこと』を執筆しているころである。この認識は当然、作品に影響をおよぼしており、マニュエルは『在り得たこと』のなかで、死後の世界を、「日の光がぼくの目を傷つけることのない仄暗い大寺院」(p. 352)のように想像している。しかしながら、上の一節で顧みられているように、死の恐怖はグリーンにおいて、ほんとうに過去のものになったのであろうか。答えは否であろう。というのも、作品のなかで、様々な人物たちをとおして描出される死の恐怖は、グリーンの内心に宿る死へのおののきを糧としていると考えないかぎり、説明がつかないからだ。死の魅惑と恐怖にみちた作品世界は、作家グリーンの意識の深層を浮き彫りにしているとみるべきである。このようにグリーンにとって、書くことは、死の恐怖との関連でも、カタルシスあるいはexorcismeの価値をになっているのである。

ここで、『幻を追う人』において、幻想とは何か、という点について考察しておきたい。はじめに言及したように、カステックスの定義にしたがえば、幻想とは現実生活における「神秘」の「闖入」によって特徴づけられるがゆえに、『在り得たこと』全体が幻想的であるとみなしうる。同様に、幻想とは日常的なものとの「断絶」、日常生活における「裂け目」を示すと考えるシュネデールの見解によっても、『在り得たこと』全体の幻想性は確認される。トドロフによれば、幻想とは「一見、超自然的な出来事」を前にして感じられる「ためらい」のことであり、この定義にそくするならば、作品の幻想性は、『在り得たこと』における伯爵の存在と、終わり近くの子爵夫人の不意の出現と死とによってもたらされる。以上のことを想起しつつ、作品における幻想の特質を明らかにしよう。マニュエルの物語る『在り得たこと』は、作品の残りの部分で開示される死の主題を統括するものとして、換言すれば、マニュエルの現実生活における死の苦悩の延長上に位置するだけではなく、マリー＝テレーズの死の想念、プラス夫人の死への歩みを極限にまで押しすすめたものとして、死の魅惑と恐怖に支配された世界を提示している。ネーグルテールの城の住人たちはジョルジュ夫人をのぞけば、死を恐れつつも死に魅せられている。トドロフの定義にしたがえば、その存在が作品の幻想性を保証する伯爵の内心からもま

た、死の魅惑と恐怖は観察されたし、また伯爵は「死者たちの恐ろしい威光」を放つ存在として、周囲の者たちに死の魅惑を行使し、死の恐怖をふきこんでいた。そして伯爵が息たえたとき、子爵夫人がマニュエルのもとに突然やってくるのは、〈死〉から、死の苦悩や恐怖からのがれようとしているからだと解せた。性行為のさなかでの子爵夫人の死は、死の魅惑と恐怖によって特徴づけられる自らの生を完結するものとしてあった。かくして、『幻を追う人』において、幻想は、死ぬという人間の条件と密接に関係しているといえよう。つまるところ、幻想とは、死の魅惑と死の恐怖との交錯から発するもの、もしくは、この二つが交錯したものであり、死にまつわる苦悩を形象化したものだと判断することができる。

4．結　び

以上、『幻を追う人』を二つの角度から、欲望と死との観点から読解・分析した。あわせて、作家グリーンにとっての書くことの意味を考究し、また、作品執筆当時のグリーンの魂の軌跡をたどり、最終的には、グリーンにおける幻想が何であるのかを明らかにすることを目指した。ここで幻想とは何か、という点にかんしてのまとめをおこない、そのあと、もう少し論を展開したいと思う。

私たちは、第二章の「欲望の世界」の結論として、幻想とは、純粋志向が招来する欲望とのたたかいから生じるものであると述べた。欲望をいだきながらも、欲望とたたかわなければならない苦しみ、この苦しみが顕在化したものが幻想であると指摘した。第三章の「死の魅惑と恐怖」では、作品における死の主題を統括するものとして、『在り得たこと』が死の魅惑と恐怖に支配された世界を提示しているという事実から、幻想とはこの死の魅惑と死の恐怖との交錯から発するもの、あるいは両者が交錯したものと断定した。それゆえグリーンにおける幻想とは、二つの苦悩、純粋志向とかかわる肉体的苦悩と、人間の条件である死にまつわる苦悩とに立脚しており、要するに、この二つの苦悩を形象化したものが幻想にほかならない。

ここから、グリーンの作品における幻想とは、いささかもメルヘン的なものではないことがあらためてたしかめられる。なるほど、作品に幻想的性格を付与する最大の要素である『在り得たこと』の全体は、欲望と死の恐怖に呻吟する日常的現実からのがれ出ようとするマニュエルの努力の結晶である。マニュエルは想像世界に逃避するにあたって、「この世の外に導くどんな道もぼくに

は美しかった」（Ⅱ－5、p. 308）と告白している。しかしマニュエルは、「この世」（＝現実世界）からの脱出の糸口をもとめた想像世界においても、現実世界における重荷、つまり苦しみをひきずっている。したがって、幻想とは現実からの逃亡への願いに源を発しているとしても、かならずしも現実の対立項としてあるのではない。幻想とは、苦渋にみちた現実の延長上にあり、現実の一つの置き換えにすぎない。このことは、『在り得たこと』の人物たちが、マニュエルの日常生活の中の人物たち、彼じしんをも含めた人物たちとけっして無縁ではなく、一定の対応関係にあることからも明白である。幻想とは、一見、現実世界との断絶を示しているようにみえながらも、現実の苦悩によって産み出されたものなのである。

マニュエルは『在り得たこと』を作成することによって、作家グリーンは『幻を追う人』を執筆することによって、肉体と死にかかわる苦悩から脱却するのであろうか。この点について、少し論及することにしよう。私たちは、グリーンにおいて、書くことが肉体的欲望と死の恐怖との関連で、カタルシスないしexorcisme的な価値をもつと述べた。ではマニュエルは肉体や死にまつわる苦悩を、『在り得たこと』の中で表現することによって、この苦悩から最終的・決定的に解放されるのであろうか。答えは否である。たしかにマニュエルは肺肝をひらくことで、一時的に内部の均衡を確立することができるかもしれない。しかしその均衡はあくまで束の間のものにすぎないのではないだろうか。欲望の苦しみについていえば、マニュエルは想像世界において、子爵夫人と性の交わりを結ぶ。だがマニュエルは純粋志向のせいで、この交わりからよろこびを得ていない。くわえて子爵夫人は性行為のさなかに絶命している。したがって、二人の性行為は欲望の充足といった本来的な目標を達成していない。欲望の苦しみは吐露されてはいても、なんら乗り越えられていない。それにマニュエルが息をひきとる間際、マリー＝テレーズに、「ぼくが愛していたのは君なんだ」（Ⅲ、p. 389）と打ち明けているように、マニュエルの愛の対象は子爵夫人ではなく、マリー＝テレーズである。とすれば、現実世界にもどったとき、愛の苦しみは相変わらず立ちはだかるし、もし生きのびていれば、マニュエルがいっそうはげしい欲望に責めさいなまれる可能性のあることは否定できないのである。

死の苦悩についてはどうか。すでにみたように、マニュエルは『在り得たこと』のなかで、様々な人物に仮託しながら、この苦悩を語り、そうすることで死の恐怖に打ち勝とうと目論む。そして作中人物として、子爵夫人の臨終に立

ちあうことによって、「マニュエルの人生のさいごの日々」は「一種の死の修業」となりえた。こうしてマニュエルは現実世界に帰還して、自らの死に立ち向かうことができるようになる。しかしながら、もしマニュエルが『在り得たこと』を完成した直後に他界するのではなく、そのあとも生存していたら、彼は死の恐怖をいだかずにいることができたであろうか。答えは否であろう。なぜなら死の恐怖とは、しばしのあいだまぎらすことは可能だとしても、肉体の欲望がそうであるように、完全に消滅させることができないものであり、間歇的に襲ってくる感情であると考えられるからだ。

作家グリーンにとっても、事情は同じである。マニュエルは死ぬが、グリーンは生き残る。マニュエルと同じく純粋志向を有するグリーンにおいて、肉体的苦悩は書くことでしばらく癒やされることはありえても、けっして消え去ることはない。カタルシス、exorcismeの営みは肉体の問題を根本的には解決しない。その証拠に、『幻を追う人』のあとの作品、とくに後期の小説『モイラ』『人みな夜にあって』(*Chaque homme dans sa nuit*, 1960)『他者』(*L'Autre*, 1971)は、いっそう痛切な欲望の苦しみを表現しており、肉体の問題が長らくグリーンの懊悩の源であったことを印づけている。死にかかわる苦悩についても同様のことがいえる。死の恐怖もまた、単なるカタルシス、exorcismeの営為によっては、容易には克服できないのであって、死の問題もまた、決着がつかないものとして残る。1930年代、あるいは中期のグリーンにおいて、幻想なるものは肉体と死の問題を解決するための手段として探求されているのであろう。しかし幻想はグリーンを肉体と死の苦しみから十全に解き放ちはしない。それどころか逆に、グリーンにおける肉体と死の問題の深刻さを浮かび上がらせているとみるべきであろう。

肉体の問題はさておき、死の問題について言えば、この問題の最終的な解決策は、グリーンにとっては、信仰の全き回復以外にはないのかもしれない。『幻を追う人』のなかで、マニュエルは過去においてカトリックの信仰をもっていたにもかかわらず、物語がはじまる時点では、信仰をうしなっている。けれどもそんなマニュエルにも、きわめて特権的な瞬間が訪れている。その件りを読むことにしよう。

「(…) ぼくの習ったお祈りの文句は、死ぬことの恐怖にたいしてなんの役にもたたなかった。ぼくは顔の上にシーツの端をひき寄せて、額の汗を拭った。ああ、誰かが来てくれたら。だがこうした時に、ぼくはひとりきりだった。

しかしながら、ある夜のこと(ぼくはほとんど信じる勇気がないのだが)、自分を

まどろませようと独り言を言っているときに、誰かが自分のそばに居るような気がした。家中の者は随分と前から眠りにつき、夜明けに先立つ時刻、病人たちがよく知っているあの時刻に近づきつつあった。それは、生が目に見えない引き潮のようにしりぞき、その引き潮とともに瀕死の人びとの吐息をも運び去っていく時刻なのだ。ぼくの心臓は少し強く打ちはじめた。しかしこわくはなかった。それどころか、ぼくの内心の何かが急に強固になった。ぼくは目を大きく見開いて待った。闇が深かったので、何も見えなかった。数分が過ぎた。「たぶん、あの人なのだ」という、奇妙な考えが心に浮かんだ。可能と不可能とをもはや区別しない熱病患者の考えが。その時だったと思う、確かに、ぼくの額の上に、非常に心地よい、燃えるようなすがすがしさをもった、一つの手が置かれたのだ。ぼくは身ぶるいし、ほとんどすぐさま眠りに落ちた」(Ⅱ－5、pp. 290－291)。

夜、孤独のなかで死の恐怖におののくマニュエルの前に、「誰か」(quelqu'un) が登場している。この「誰か」は暗闇の中で目には見えないけれども、マニュエルの内心を強固にし、それから、マニュエルの額の上に手を置くことによって彼を眠らせている。つまりこの「誰か」は瞬間的であるにせよ、マニュエルを死の恐怖から救い出している。マニュエルはこの「誰か」の出現に際して、「たぶん、あの人なのだ」(Lui, peut-être.) と考えている。「あの人」とは誰か。上の文章に先立つ段落で、イエス・キリストへの思いが披瀝されていることから、「あの人」とはイエス・キリストのことだと解釈できる。こうして上の引用文は、イエスとの出会いという特権的な出来事を叙述したテクストだということになる。

このことは、この引用文を、1934年11月24日付の、グリーンの『日記』の中の記述と比較するならば、いっそう明瞭になる。グリーンは書いている。

「先日の晩、突然の、説明できない心の動きから、そしてまるで前に押し出されたかのように、私は窓の前にひざまずいた。どうして窓の前なのだろう？　私にはわからない。黄色のカーテンがひかれていた。私は家の中で一人きりだった。しかしながら、誰かが一分近くのあいだ背後に居たのだ」[113]。

ここでも、「誰か」の出現が語られている。この「誰か」とは、グリーンがひざまずくことによって現れるのだから、しかもグリーンがひざまずくのは祈りをとなえるためであるのだから、祈りの対象となった存在だと解することができる。グリーンは、この日記にかんして、1969年に付けた註のなかで、ここに出てくる「黄色のカーテン」のぼろ切れを思い出の品として長らく保管してきたことを伝えている[114]。ここから、この神秘的な出会いの体験が、人生の転

換点を画するような決定的な事件であったことが察知できる。さらにグリーンは同じ註で、「この日から私の人生は変わった。しかし私は四年間待たねばならなかった」[114] とも言っている。いったい、何を四年間待たねばならなかったのであろうか。それはカトリック教会への決定的復帰であろう。グリーンのカトリシスムへの帰依は1939年4月のことなので、正確にはこの日記の日付から四年五カ月後のことであるが、決定的回心のことが視野に入れられていることはまちがいない。とすれば、この「誰か」との出会いの体験が、カトリック信仰への回帰、決定的回心へと方向づけた出来事であり、「誰か」がイエス・キリストを指し示すことは疑いようのないかたちで諒解される。

『幻を追う人』の中の先の引用文とこの日記の記述とを照合することにしよう。『幻を追う人』においては、「誰かが自分のそばに居るような気がした」(J'eus l'impression que quelqu'un se tenait près de moi.) と表現され、日記では、「しかしながら、誰かが (…) 背後に居たのだ」(Quelqu'un pourtant s'est tenu derrière moi.) と言いあらわされている。二つのテクストのあいだには、près de moiとderrière moiというように、「誰か」が位置する場所に違いがある。また、「居る」(se tenir) という動詞の時制が、半過去 (se tenait) と複合過去 (s'est tenu) といったように異なっている。けれども、「誰か」の現前を語っているという点で、内容はまったく同じであると断定することができる。1934年11月24日付の日記のテクストと突き合わせることによっても、『幻を追う人』における先の引用文の中の「誰か」がイエス・キリストであることが確認される。それゆえ、『幻を追う人』において、イエス・キリストはマニュエルを死の恐怖から解き放つためだけではなく、マニュエルに信仰の全面的な回復をもたらすためにも出現しているとみなしうる。けれども、マニュエルはこののち、宗教的な救いをもとめて、カトリック信仰に歩みよることはない。「誰か」が「あの人」つまりイエス・キリストなのだという思いを、「可能と不可能とをもはや区別しない熱病患者の考え」として斥けてしまう。こうして先のテクストは『幻を追う人』のテクスト全体のなかで、物語の展開に影響を与えることのない孤立したテクストとしての位置にとどまるのである。

おそらく先の引用文は、語り手マニュエルではなく、作家グリーンの内面にそくして把握すべきであろう。先の引用文は、イエス・キリストの顕現を待ち望む作者グリーンの切なる願いを反映していると思われる。繰り返すまでもないが、『幻を追う人』を執筆中、グリーンはカトリック教会から離れていた。

しかし宗教的な救いを希求する気持ちもあるわけで、その気持ちが先の文章を産み出したのだとみなしうる。先の文章は、第二部に含まれているので、1932年9月23日から1932年11月16日までの時期に書かれた。テクストはその時期におけるグリーンの魂の一面を覗かせているだろう。グリーンが実際にイエス・キリストと邂逅し、恩寵の訪れをうけるのは、引用した日記の日付からわかるように、1934年11月である。『幻を追う人』のなかに忍びこませた願いが、二年後の現実の体験をよび寄せたのだと判定することもできる。1934年11月24日付の日記のテクストは、『幻を追う人』の中の先のテクストの延長上にあり、二つのテクストは緊密に結びついている。『幻を追う人』はカトリック教会から遠去かっていることでの苦しみを映し出しながらも、1934年11月の神秘的体験を経て、1939年4月の決定的回心へと至るグリーンの魂の軌跡をもかいまみせているのである。

註

110) 目次の1．に該当する部分は、『「幻を追う人」読解のこころみ(1)』、山口大学「文学会志」第46巻、1995、pp. 58－71を、2．の(1)(2)にあたる部分は、『「幻を追う人」読解のこころみ(2)』、山口大学「独仏文学」第18号、1996、pp. 97－112を、2．の(3)は、『「幻を追う人」読解のこころみ(3)』、同「文学会志」第47巻、1996、pp. 21－38を、2．の(4)(5)は、『「幻を追う人」読解のこころみ(4)』、同「独仏文学」第19号、1997、pp. 1－18を、を、3．の(1)(2)は、『「幻を追う人」読解のこころみ(5)』、「文学会志」第48巻、1997、pp. 113－128を、3．の(3)は、『「幻を追う人」読解のこころみ (6)』、「独仏文学」第20号、1998、pp 1－19を、3．の(4)のa．b．c．は、『「幻を追う人」読解のこころみ(7)』、「独仏文学」第21号、1999、pp. 27－48を、3．の(4)のd．e．は、『「幻を追う人」読解のこころみ(8)』、「文学会志」第50巻、1999、pp. 87－100を参照。

111) *Les Années faciles*, *Journal I*, 30 mars 1933, Ⅳ, p. 235.

112) *Les Années faciles*, 2 décembre 1932, p. 210.

113) *Les Années faciles*, 24 novembre 1934, p. 347.

114) Ibid., p. 347.